

## 現代レジャー論 (5)

## レジャーとしての自由学芸教育

— M. J. Adler を中心としての考察 —

松 田 義 幸

## On the meaning of leisure and liberal arts

Yoshiyuki MATSUDA

It is said that the identity of American and European culture is based on the Ancient Greeks. In Ancient Greeks, the liberal arts were valued highly as the most important and the basic way to make human value, the existence of human beings and the universal values noble and honorable, which were the basis of the individual's happiness, the stability of democracy and the democratic society. That's way where the American and the European society face to the politician, social and humanistic crisis, they tend to come to life again the spirit of Ancient Greeks culture. The aim of this paper is to think about the relationships of leisure and liberal arts, referring to the work of M. J. Adler, who has seekd the policy of the learning society and the way of liberal arts education in USA.

Key words : Adler, Liberal arts, Leisure

## 1. レジャーとしての自由学芸教育

通常、自由学芸 (liberal arts) というと、西洋中世においては、自由民 (liberi) だけに習得を許された学芸で、文法、論理、修辞の三科 (trivium) と算術、幾何、音楽、天文の四科 (quadrivium) の七科をさし、また近代以降の大学では、広く教養を身につける目的の語学、哲学、歴史、芸術、社会科学、自然科学などの科目をさしている、このようにとらえられている。今日の大学における一般教育、教養課程教育 (liberal education, general education) は、この自由学芸教育の理念に沿ったものである。

それでは、西洋中世において、自由学芸七科はどのようなコンテキストの中に位置づけられていたのか。ここに興味深い一枚の図がある。Dante Alighieri (1265-1321) の「神曲」の天堂篇の構成を説明する図である。この中で自由学芸七科が、どのような魂に関連するかを説明している<sup>(注1)</sup>。

第一歌のミューズの女神たちへの呼びかけ、ダンテとベアトリーチェの地上の楽園からの昇天、ベアトリーチェはダンテになにゆえにかかる昇天ができたか、そして宇宙はいかなる秩序をもつかを説明。この後に、

1. 文法—第一天 (月天)、誓願を全うしなかった魂
2. 論理学—第二天 (水星天)、活力をもって善行をした魂
3. 修辞学—第三天 (金星天)、恋に燃えた魂
1. 算術—第四天 (太陽天) 知識人の魂
2. 音楽—第五天 (火星天) 信仰のために戦った者の魂
3. 幾何—第六天 (木星天) 正義を行なった者の魂
4. 天文—第七天 (土星天) 黙想を行なった者の魂

の歌が続く。そしてさらに神の国へ向かって

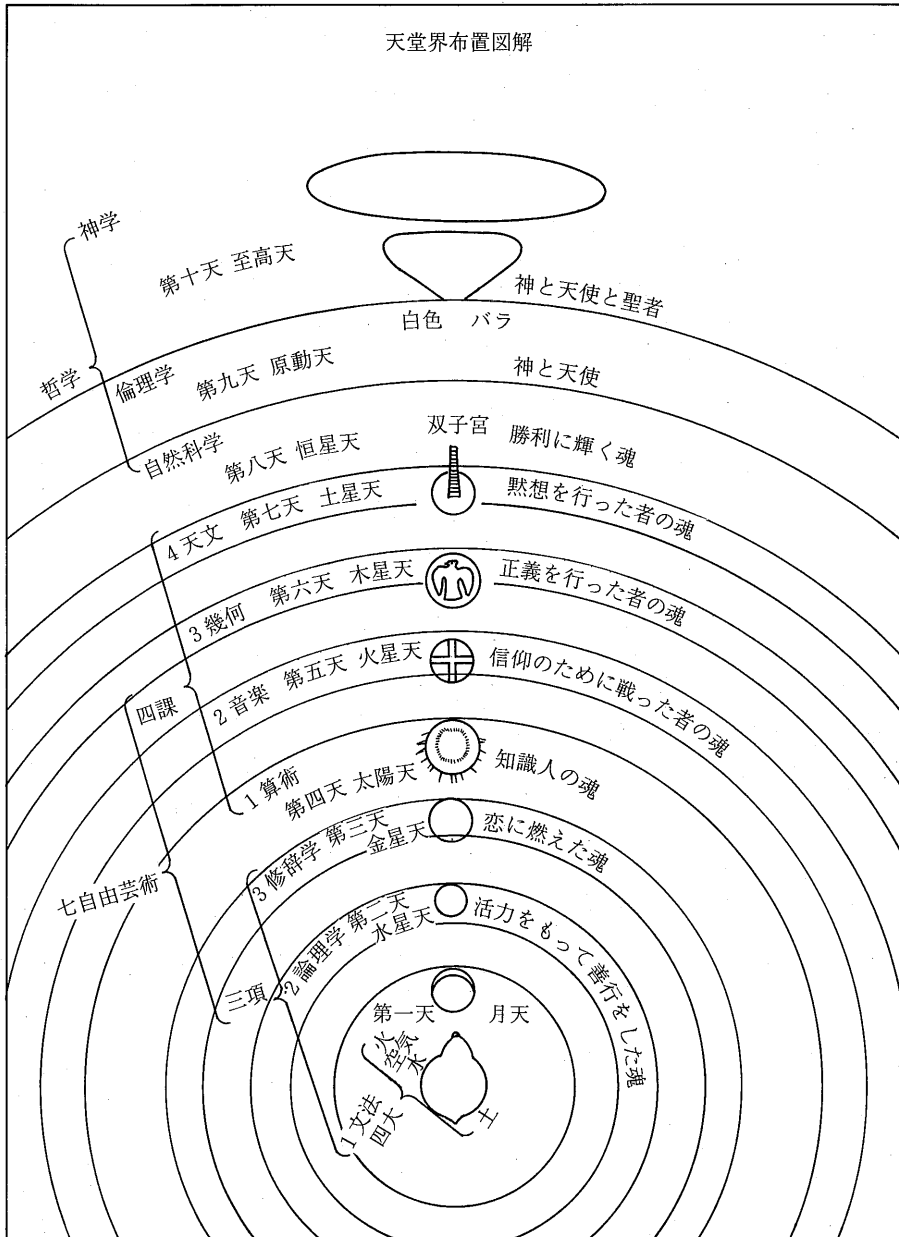


図1 Dante「神曲」天堂篇と自由学芸七科  
(野上素一訳, 神曲・新生, 世界文学体系6, 筑摩書房より 卷末付図参照 昭和37年版)

哲学 (自然科学) - 第八天 (恒星天), 勝利に輝く魂  
 哲学 (倫理学) - 第九天 (原動天) 神と天使  
 哲学 (神学) - 第十天 (至高天) 神と天使と

聖者が続く。  
 ボローニャ大学に学んだDanteの博識はよく知られているが、訳者の野上素一は、その解説の中

で、「神曲」は、古代、中世およびウマネシモ時代の一代貯水池でありこれまで書かれたもっとも完全な百科全書とよんで恥ずかしくないものである」<sup>(注2)</sup>と批評している。

そもそも百科全書、百科事典を、encyclopediaというわけであるが、これにギリシア語をあてると egkuklios paideia になる。

egkuklios は、circle, general で「一般」、paideia は、humanity で「人間的教養」をさし、まさに、教養課程の一般教育、自由学芸教育を意味している。Dante がなにゆえに天堂篇に自由学芸七科を位置づけたのか。それは「徳 (arete : 卓越性、優秀性) をめざしての教育」の egkuklios paideia (自由学芸七科、そして自然科学 倫理学 神学の哲学) が、人間の魂を理想とする普遍的価値、倫理に近づけ、そして、高貴 (noble, honorable) にしてくれるととらえていたからであろう。

Dante の「神曲」には、ミューズの女神をはじめとするギリシア神話、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、といったギリシアの賢人たちが出てくる (もちろん、これから以降の学芸、賢者たちも出てくるが)。この Dante よりも先に生まれ大きな影響を与えたと思われる Saint Thomas Aquinas (1225-1275) は、「アリストテレス形而上学注釈」の中で、自由学芸の基本アイデアを Aristotle に求め、「知ることを目標とする学芸だけが自由学芸 (artes liberales) と呼ばれ、何らかの実践によって到達されるべき実益をめざす学芸は奴隷的学芸 (artes serviles) とよばれる」、こう述べたといわれている<sup>(注3)</sup>。

このように古代ギリシアにおける自由学芸は、中世のように神学の下できちんと体系化されたものでなく、もっと広くとらえられていたようである。

Aristotle, Aquinas の流れに沿って、思索を続けている Josef Pieper (1904- ) は、「Leisure—The Basis of Culture—」(邦訳名「余暇と祝祭」)の中で、「『職能人 (functionary)』というものは、『訓練』によって作りだされます。『訓練』の特徴は人間のうちの特殊な一面だけに目を向けること、同時にまた、世界の一片だけに注目するということです。これに対し、真の『教養は』全体に向います。自分が世界の全体に対して、どのような関係に立っているかをわきまえて

いる人、その人こそ真に教養のある人です。『教養』は全人 — 世界全体を受容しうる者であるかぎりでの — にかかわります。いいかえると、事物の総体をとらえうる者としての人間全体にかかわるのです」と述べている<sup>(注4)</sup>。

ここで Pieper のいう教養とは自由学芸をさしている。

今日、「人間にとって、ワークとレジャーとどちらが大切か」と質問されれば、誰しものがワークをあげるであろう。しかし、古代ギリシア、西洋中世においては、今日の常識と違い、自由学芸を身につけるレジャーが、大切だと考えていたのである。

Aristotle は、「政治学」の中で、次のように述べている。人間の生活はワークとレジャー、戦争と平和の四つに分けることができ、ワークと戦争は必要 (nessessary) で有用 (useful) な生活であり、レジャーと平和は高貴な (noble, honorable) な生活である。そして、それぞれの関係は、戦争は平和のため、ワークはレジャーのためにあるといえる。人間はワークと戦争のための能力を身につけなければならないが、それより以上に大切なことは、レジャーと平和を高貴に生きる能力を身につけることである。そして後者のための教育、学習支援は生涯にわたって配慮されなければならない<sup>(注5)</sup>。この Aristotle の考え方の中に、専門教育 (職業教育) と一般教育 (自由学芸教育) の考え方を読みとることができる。

人間はワークや戦争に就いている時には国を亡ぼすことはないが、人生の目的であるレジャー、平和の時を迎えると、ぜいたくと、放蕩におぼれ国を亡ぼすことになりやすい。そうならないようにするためには、高貴な生活の方法を身につける必要がある<sup>(注6)</sup>。

ところで、わが国における翻訳をみると、ギリシア語の anankaaios, chresimos には「必要・有用なもの」が当てられており、英語の nessessary, useful の意味に対応しているが、自由学芸と関係する kaaios には、「立派な」(岩波文庫訳)「美しい」(石山脩平訳)<sup>(注7)</sup>などが当てられており、英語の noble, honorable の意味に 1 対 1 で対応していないように思われる。Aristotle にとって、なぜ高貴な価値の教育が大切であったのか。それが民主政治、民主社会の前提になると考えていたからである。この問題について、廣川洋一は、わが国に

おいて、このように理解している人は少ないが、政治学者の嶺山正道が、Alistotleの自由学芸と政治の関係を正しくとらえていると、評価している。

「アリストテレスの『政治学』は、(中略)その第七巻、第八巻が教育に関する見解にあてられている。そして政治的な理想と教育の原則との関係が述べられている。これは誠にめずらしい。よく考えてみれば、当然のことなのだが、近代になってから政治学と教育学とは全く袂をわかってしまい(中略)、特に日本ではその傾向が強い。戦後日本で教育の中立と言うことが主張された(後略)教育基本法にある『良識ある公民たるに必要な政治的教養は、教育上これを尊重しなければならない』(第八条)とあるにもかかわらず、教育界には政治と教育との根本的關係について関心を払うことが避けられてきた。そこに戦後民主教育の欠陥が一つある」嶺山正道「アリストテレス全集」月報11、(岩波書店)<sup>(注8)</sup>

わが国では、嶺山のようなAlistotle理解が教育を研究し実践する側にある教育学者から、なにゆえに出てこなかったのであろうか。つぎに一つのケース研究ということで、シカゴ大学を中心に1930年から展開されてきた、自由学芸教育運動をとりあげてみたい。

## 2. アメリカの自由学芸教育運動

この運動を中心になって支えてきた人が、Mortimer J. Adler (1902- )である<sup>(注9)</sup>。Adlerは1930年代、1940年代のアメリカの状況、世界の状況を次のようにとらえていた。

### (1) 戦前の世代 (1940)<sup>(注10)</sup>

ファシズムと世界大対戦の脅威の中で、偏見、エゴイズム、ニヒリズムが蔓延し、人間、社会がよりどころとする共通の価値、倫理基準を喪失してしまっている。このために真の民主政治、民主社会から遠のき、「力は正義なり」に陥ろうとしている。民主主義をめざす政治、社会は、普遍的な価値、倫理基準に根ざす自由を大切にするからこそ、偏見、エゴイズム、ニヒリズムを取り除き、ファシズムや戦争の危機を克服することができる。こういう価値、倫理基準を喪失しないようにするために、教育の側からなにをなし得るのか。それは自由学芸教育を重視することである。しかし、今日のアメリカにおいて、この自由学芸教育の重要性が認識されていない。状況は悪い方向

かっている。教育、倫理、政治といった規範を扱う学問が軽視され、実証的学問(実証哲学、社会科学)が尊重され、このために価値、倫理基準は、時代や社会が変われば、相対的に変化するものであり、また人間個人個人によって違うものであるという風潮をつくっている。

### (2) 民主政治と自由学芸教育 (1957, 1958, 1976)<sup>(注11)</sup>

アメリカの教育はいかにあるべきか。AdlerはThomas Jefferson (1743-1826)が1817年に議会に提出した公教育制度案に検討を加えながら、政治と教育のあり方を考察している。

Jeffersonの教育案—アメリカの市民は労働に就く者と教養を身につける者の二つのクラスに分かれる。すべての子どもたちは、三年の初等教育を受けた後に、二つの進路に分かれる。一方は労働に就く者で、彼らの選択に従って、農業に就くか、手工業の年季奉公に就くかをきめる。もう一方は一般教養を身につけるために、大学まで進むことができる。

Jeffersonの頃のアメリカは、産業的にも前工業社会で、政治的にもみんなが市民権を持っていたわけではなかった。そこで古代ギリシアのように、支配階級の市民に一般教養が必要だと考えていた。

しかし、今日のアメリカにおいては、十分に工業化が進み、だれもが政治的市民権と自由時間を持っている。従って、良識ある市民になるための教育、学習機会は、すべての人々に平等にひらかれていなければならない。経済的に自立し、聡明な良識ある市民として行動し、高貴で慎み深い人間生活を送ることができるようにする。こういう生活目標を支援する教育こそが望ましい。

### (3) 教育が基礎におくべき普遍的原理は存在するのか (1941)<sup>(注12)</sup>

それではAdlerの自由学芸教育観とはいかなるものであったのか。Adlerは、自由学芸教育の目的は、常にどこにおいても同じだととらえている。それは時と場所によって違ってはならないし、また個人差によって、文化の違いによって変わるものであってはならない。従って、自由学芸教育は、その基礎に普遍的価値、倫理基準をおくべきである。これが自由学芸教育の基本である。自由学芸教育で重要なことは、この普遍的価値、倫理基準を、文化の違いとところで、習俗の違いとところで、

いかに実際に適応するかである。なぜこのような立場をとるのか。

それはまず第一に、「人間の性質は、文化が違っていても同じだ」ということである。人間の性質のこの普遍性、不変性を前提におけば、自由学芸の教育の基礎にも、この普遍性の原理をおくべきである。

第二に人間の性質は、潜在的能力を持っていても、誕生の時点にみるように、十分には開発されていない。そこで、自由学芸教育は人間の性質の向上プロセスとしてとらえなければならない。

第三に自由学芸教育の目的は、徳 (arete) をめざしての教育で、普遍的価値、倫理基準の高みに近づき、高貴な (noble, honorable) 習慣を身につけるところにある。そして、究極の目的は、幸福、あるいはよき人間生活に向かうことを支援することにある。

(4) 規範としての自由学芸教育 (1951) (注13)

自由学芸教育がこのような目的に向かって行なわれれば、人々は、理想とする市民、理想とする社会、理想とする政治を学ぶことができる。また理性の権威と規律ある自由の大切さを学ぶことができる。このようにみえてくると、教育と個人の問題も、教育と社会の問題も、その基本は規範的なものだと見える。この問題は記述的な科学によっては解決はできない。それは道徳哲学、政治哲学によって解決すべきことである。ところが、最近の風潮は、普遍的価値、倫理的基準を避け、科学的方法によって答えを引き出そうとする傾向が強い。たしかに科学的方法は、測定したり、観察したり、あらゆる種類のデータを集め、モデル化することには向いているが、教育において何がなされなくてはならないか、この規範的問題には答えてはくれない。

- 幸福とはなんであるか
- 自由とはなんであるか
- 平等とはなんであるか
- 正義とはなんであるか
- 真理とはなんであるか

これらの問題の解決は、道徳哲学と政治哲学の課題である。こういう問題に取り組む能力を身につけさせることが、人間を自由にする自由学芸教育の目的である。

このようにみえてくると、規範的問題の答えにも、幾何学の一般原理のように、普遍的心理があり、

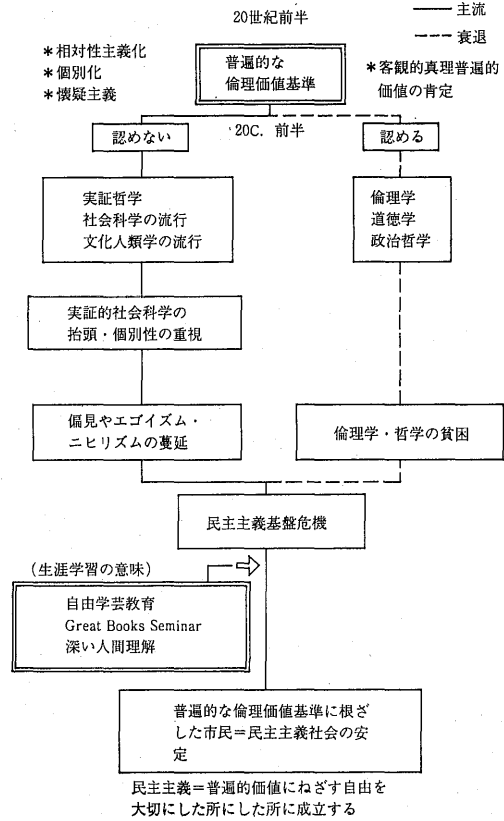


図2 Adlerの20世紀状況の認識

それは時代や社会を越えた、また種族の習俗や個人個人の偏見やエゴイズムを越えた問題だといえる。ところがいま世界に広がっているファシズムは、国家を神格化し、人々をその間違った祭壇のいけにえにしようとしている。また、アメリカの教育を見ても、リベラリズムの名の下に、あまりに普遍的価値、倫理基準を相対化し、多様化させ、懐疑主義とニヒリズムを蔓延させている。

(5) 職業のための専門教育とレジャーのための自由学芸教育 (1951) (注14)

そこでAdlerは、必要性 (necessity) と有用性 (usefulness) につながる職業教育 (vocational education) と高貴な価値 (noble, honorable) につながる自由学芸教育 (一般教育) の調和をはかる教育を提起する。

自由学芸教育の基本は人間の向上を目的としたプロセスにある。そしてこの自由学芸教育はレ

ジャーとの関連で理解されるべきである。従って、この問題を扱うには

- ① レジャーとの関連で自由学芸教育を定義すること
  - ② ワークとレジャーとの違いをよく検討して、自由学芸教育の意義をとらえること
  - ③ 産業民主社会に向けて自由学芸教育の重要性をとらえること
- の順序を踏むべきである。

#### レジャーとの関連における自由学芸教育の定義

一般的には教育は実践的活動であり、それにはある目的を達成するために工夫された方法をとまなう。そして、だれもが否定できない教育の定義は、「人々自身と社会との関係において、人間の性質を向上させることを目的としたプロセスである」と言うことである。しかし、教育哲学における問題は、「人間が違えば、良き生活といっても、人間に善といっても、また人間を向上させる条件といっても違ってくるのではないか」ということである。この問題には、二つの見方があるように思われる。一つは個々人に固有な才能、能力があるということ、もう一つはあらゆる人間に共通する才能、能力があるということである。そこで一つの教育の見方は、個々人の固有な才能、能力を考慮にいれて、職業との関係において、人間の性質を向上させることである。もう一つの教育の見方は、人間の差異性 (differences) ではなく、共通性、同一性 (similarities) に着目して、教育によって、人間の共通の性質の向上をはかろうということである。

この後者の考え方によれば、人間にはすべて共通にできること、またしなければならないことがあり、それを育むのが教育の基本的な課題である。この二つのどちらの見方に立つかで、専門教育かまたは一般教育のどちらを選択するかに分かれる。ここで専門教育は職業教育といってよく、それはワーク、レイバーの分野に関連する。一般教育は自由学芸教育といってよく、一般教育の努力は、人間を人間として扱う自由な修養に向けられる。この教育観は Aristotle の教育観に基づいている。

Aristotle によれば、「必要性、有用性」と「高貴性」に分けているが、「必要性、有用性」は「付帯的 (extrinsic)」であり、「高貴性」は「本来的 (intrinsic)」といってもよい。前者の教育目的

は、オペレーションを上手にやって、何かを完成させるところにある。後者の教育の目的は、人間の卓越性、完全性に向かわせて、人間の性質を正しくよい習慣にしていくことにある。もちろんこのように単純に分けることの難しい場合もあるが、ここまでくると問題の核心に入ったといってもよい。

職業教育は、ワーク、レイバーの訓練、修練である。それは一般化よりも専門化を志向している。それは「付帯的なもの」「必要なもの」「有用なもの」であり、生計をたてるための働く能力を身につける教育である。一方自由学芸教育はレジャーのための教育、修養である。それは一般化の傾向を大切にし、「本来的なもの」「高貴なもの」であり、人間を自由にする教育である。しかし、危険なことは、自由学芸教育というと、それを中世のように非常に狭くとらえて、文法、修辞学、論理学といった七科のように解釈する人が多い。この自由学芸教育は古代ギリシアの哲学者 Plato のように、大きくは三つに分けて考えた方がよい。それは一つは身体的価値 (physical value) を高貴 (noble, honorable) にする教育、修養

二つめは倫理的価値 (moral value) を高貴にする教育、修養

三つめは知性的価値 (intellectual value) を高貴にする教育、修養

である。この三つが職業教育に対して、自由学芸教育に入る、また入れるべき分野である。

#### ワークとレジャーの違いの検討、自由学芸教育の意義の検討

ここで再び、ワーク (レイバーも含めて) とは何か、レジャーとは何かを検討し、自由学芸教育と産業社会におけるレジャーの意味を探ってみた。

#### 人間の生活時間、1日24時間の配分に着目した検討

一日24時間を単位として、私たち人間の週のリズム、月のリズム、年間のリズムができあがっている。

一つめは、生理的的必要時間である。これは睡眠、食事、洗濯、入浴、フィットネスのような運動まで含まれている。

二つめは、ワーク、レイバーのための時間である。賃金をあてにして働く時間、所得をあてにして働く時間である。

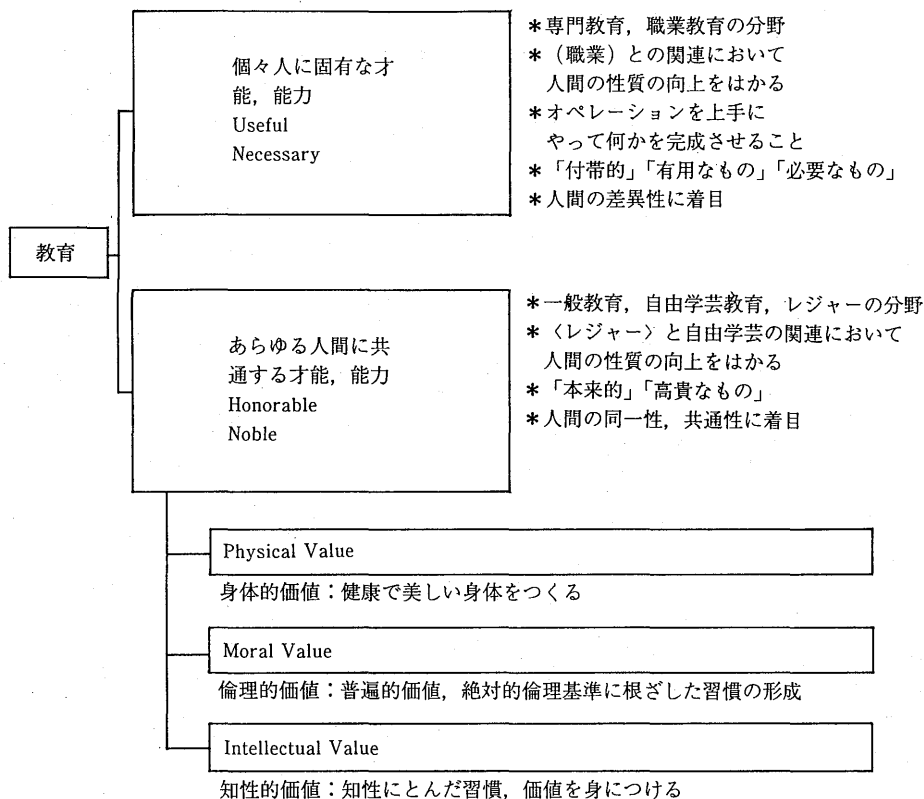


図3 Adlerの教育概念図

三つめは、自由時間、スペア・タイムである。これには2つの配分がある。一つはプレイである。このプレイにおいて、レクリエーション、アミューズメント、気晴らし、娯楽といった時間つぶし(Killing time)をする。(AdlerはHuizingaなどの一般のプレイ概念よりも狭い概念に用いている。)もう一つがレジャーである。ふつうレジャー活動と言うと何を思いおこすか。おおかたの人は学習、読書、スポーツ、書き物、会話、手紙の返事、友情、政治的活動、家庭的な仕事、芸術活動などをあげるであろう。これらはワーク、レイバー、プレイではない。

この2つの自由時間にもう一つ、レスト(rest)を加えておきたい。通常レストと言うと、睡眠やレクリエーションを思いうかべる人が多いが、ここでレストという時には別の意味に使いたい。レストを観想(contemplation)の意味に使いたい。

#### ワークとレジャーの活動の検討

ワーク(レイバーも含めて)は、人間が生物的に必要な活動で、もしも十分にその活動から所得をあげていれば、労働時間よりも自由時間を選好するであろう。この生物的に必要な活動だけに従事していたのでは、人間は自分自身を高貴な価値にかかわらせることができないからである。しかし、このような選好をする前提には、ワークよりもレジャーの方が大切であるという社会的コンセンサスがなければならない。

#### 産業民主社会における自由学芸教育の重要性

ここまでくると職業教育と自由学芸教育の違いは明確になったのではないかと思う。

職業教育は、所得を得るための教育である。一般教育は、レジャーとしての自由学芸のための教育である。

従って、職業生活とレジャー生活を充実させるために、次の諸点に配慮する必要がある。

第一に、教育は職業教育と自由学芸教育の調和がはからなければならない。

第二に、自由学芸教育は生涯を通して行なわなければならない。

第三に、社会人においても、自由時間に学習が習慣化してくると、先生のいる、いないにかかわらず、また義務からでなく、割当てとしてではなく、対話や討論を楽しみ、読書研究を楽しむことができるようになる。そこで生涯学習を支援する環境整備が大切になってくる。

第四に、労働時間と自由時間の人間化(humanization)に向けて、また民主的な産業社会に向けて、自由学芸教育のあり方を十分検討する必要がある。

今日の社会では、Veblenの「有閑階級論」のように、小数のレジャー・クラスと圧倒的多数のワーカー・クラス(生物的に必要な労働だけに従事しているクラス)に分かれているわけではない。昔のように、二つのクラスに分かれるのではなく、各人の生活時間を労働時間と自由時間に分けることができるようになった。しかし人々の価値観、ライフスタイル、社会システムが、ワーク中心、必要性、有用性中心に構造化されているために、有り余る自由時間をつくり出しても、それが高貴な価値観、ライフスタイル、自由学芸に結びついていない。レジャーの能力が低いために怠惰な過ごし方しかできない。このために、今日の産業社会の下では、レジャーはレジャー本来の意味を喪失してしまっている。従って、産業社会の民主化をはかり、レジャーをレジャー本来の意味に再生させるには、すべての人間に対して、生涯にわたって、自由学芸教育・学習の享受機会が、平等にひらかれていなければならない。それが真の民主主義の社会、政治、市民生活の実現に向けてなにより重要なことである。

### 3 ヒューマニティの危機克服にむけて

Adlerの自由学芸教育論、そしてこの理論に裏打ちされたGreat Books運動は、ファシズム批判、懐疑主義とニヒリズムの克服方法として始まり、そして、今日まで続いている。この運動とその理論は今日においても説得的である。ところで、Adlerの自由学芸論がそうであるようにレジャー

論、プレイ論の分野で名著として評価の高いJosef Pieperの「余暇と祝祭」、Johan Huizinga(1872-1947)の「ホモ・ルーデンス」も、ヒトラーのファシズム批判を背景に出版されたものである。

Pieperは1934年に、ナチスの七主徳の一つである「不屈の精神」をきびしく批判し、人生を労働世界にすべて従属させてはならないと、レジャーの重要性を提起したのである。そして、1947年に「余暇と祝祭」を書き上げている。戦前はファシズムの中で、人間の生き方と社会を労働世界に従属させ、そして戦後、今度は、社会主義、共産主義の中でまた同じように労働世界に従属させようとしている。なぜ同じ過ちを二度も起こそうとしているのか。家を作るために働くことは大切であるが、心の家を作るためにレジャーを忘れてはならない。

Huizingaは、オランダのライデン大学の学長に就任した1933年に、「ホモ・ルーデンス」(注15)の骨子を、「文化における遊びと真面目の境界について」と題し、講演を行なっている。「ホモ・ルーデンス」は1938年の出版であるが、そのころのヨーロッパはヒトラーの支配が強まり、1935年ヒトラーを直接批判した「明日の影の中で」を出版している。Huizingaは、人間について次のような見解をもっている。人間の本質はホモ・ルーデンス(遊戯人)にある。文化が豊かであった時代は、その時代に生きた人びとのものの見方、考え方、感受性が遊び精神で彩られていたが、19世紀から20世紀にかけて、この遊び精神が軽視されるようになり、文化は危機に直面している。

Adlerの自由学芸教育論、Pieperのレジャー論、Huizingaのプレイ論は、その論の練り上げられた時代背景、社会背景を抜きにして、現代の社会コンテクストの中で読んでも、読み応えが十分ある。このために、その時代背景、社会背景を考慮するということがない。これら三人の問題認識の共通性を論じた研究はまだないといってもよい。これらの自由学芸論、レジャー論、プレイ論が、ファシズムへの傾斜の中で、そして懐疑主義とニヒリズムの広がる中で、古代ギリシアの文化に回帰しながら出てきたことは、注目に値する。先の三人ばかりでなく、たとえばEdmund Husserlのような人たちにとってもヨーロッパ的(アメリカなどを含めて)ヒューマニティの危機が、なぜ起きて



きたのか、強い関心事であった。彼らはヨーロッパたらしめるものは、つまり精神的アイデンティティは、古代ギリシアの哲学から生まれたと考えていた。このギリシア哲学は、存在とか、普遍的価値の樹立にあり、世界がなんであるかを知る情熱に充ちていた。しかし近代に入り、Galileo, Descartes の考え方にみられるように、自然科学的認識方法が抬頭していると規範を扱う学問、中でも哲学が後退し、存在とか、普遍的価値の探求ということがなくなってしまった。Husserl の弟子の Heidegger などは、「存在の忘却 (forgetting of being)」といているほどである<sup>(注16)</sup>。こうなると、どうしても、懐疑主義、ニヒリズムが蔓延してくる。その結果、人々は見えるもの、聞こえるもの、さわられるもの、実証できるものしか信用しなくなる。価値観や倫理は、時代や社会によって違うものであり、個人個人をとってみても違うものであると考えるようになる。そして確かにかかわることのできる世俗世界の所有、消費に関心をよせるようになる。

Adler, Pieper, Huizinga は、ヨーロッパのヒューマニティをいかにして再生するか、その基本をいずれも、古代ギリシアの哲学、文化に求め、そこから自由学芸論、レジャー論、プレイ論を展開している。古代ギリシアの人びとのように、見えないものに目をこらし、聞こえないものに耳を傾け、感受性を豊かにして全ての世界とかかわれるようにする、精神の世界の知的探求、知的冒険を楽しむことができるようにする。そのような人間的高貴な生活を大切にすれば、そこで存在とか、普遍的価値を見いだすことができるからである。それが自由学芸、レジャー、プレイの意義である。

この点について、歴史学者藤縄謙三は、「ギリシア悲劇における詩と真実」<sup>(注17)</sup>というエッセイの中で、Aristotle の「詩学」や Hesiod の「神統記」を引用しながら、フィクションによるアプローチが、事実のアプローチよりも存在、普遍的価値をとらえる優れた方法であると述べている。「歴史が起こったことを語り、詩が起こり得ることを語るという点で、両者は異なる。それ故に詩の方が歴史よりも哲学的で荘重なものである。詩はむしろ普遍的なことを語り、歴史はむしろ個人的なことを語るからである。」「詩学」第九章) Aristotele の詩のイメージは、演劇や舞踏まで含むもので、フィクションの表現世界全体にまで広げ

てもよいだろう。

このように古代ギリシア人がフィクションの表現世界に存在とか、普遍的価値を見い出していたのは興味深い。

「あまたの虚偽を真実らしく語ることも自分たちには可能だが、しかし自ら欲すれば、真実を語ることも可能なことです」(神統記)

フィクションの表現世界を通じて、普遍的価値を追求できる。この視点がまさに Adler, Pieper, Huizinga にも共通していたのである。

今の学生達に、授業時において、普遍的価値は存在しているかどうかをたずねると、7割ぐらいは、「それは個人個人によって違うものであるし、また時代や社会によってまた民族によって違うものである」と応える。しかし、これまで考察してきた手順で授業を進めていくと、学生達も、存在とか、普遍的価値の追求の大切さに気づくようである。今日の状況も Adler, Pieper, Huizinga の1930年代、1940年代の頃の状況とさほど変わっているとは思えない。今日日本においても「生涯学習、学習社会」の構想とか、また大学システムの大綱化、簡素化の提案(教養課程の縮小、専門課程の拡大・充実)がなされている。しかし本エッセイで検討してきたようなプロセスがそこに全く見られないのは、大きな問題である。

自由学芸、レジャー、プレイが軽視されている社会は、個人の幸福にとっても、また民主主義をめざす政治、社会にとっても、不幸なことである。この古代ギリシア人の知恵に立ち戻って、現在直面している問題解決に当たってもらいたいものだと思う。それは文化背景の違う日本においても、意味のある検討であるからだ。今日の日本において、個性化が尊重され、価値観の一層の多様化がトレンドとみなされている。予測だけでなく、少衆化、分衆化の現象は、随所にみられる。こういう状況の中では、政治も、社会(コミュニティ)も、コンセンサスや相互理解をとりにくい。

Adler がなんども指摘していることであるが、人間の共通性、同一性に着目して、人びとの間に、世代を越えて、民族を越えて普遍的価値、倫理基準を共有できるようにすべきである。この普遍的価値、倫理基準が共有され、人びとが自由学芸、レジャー、プレイの世界に楽しみながら、それを高貴なものにできれば、そこに相互理解、信頼関係の基礎をつくることができる。それは個人の幸

福にとっても、真に民主的な政治、社会を作る上でも、最も大切なことである。

個性尊重、差異性の重視、専門化、細分化は産業社会の要請であるが、産業社会を民主化するためには、普遍性の尊重、同一性・共通性の重視、一般化、統合化との調和をはかっていかなければならない。

こういうヒューマンティの根源に、自由学芸、レジャー、プレイが関係していることに現代人はもっと気づくべきである。

#### 注・引用文献・参考文献

- 注1) ダンテ(野上素一訳)(1962): 神曲・新生。世界文学体系6, 筑摩書房 巻末付図参照
- 注2) (注1)に同じ資料 p.356.
- 注3) ヨゼフ・ヒーパー(稲垣良典訳)(1988): 余暇と祝祭。講談社学術文庫 p.53.
- 注4) (注3)に同じ資料 p.53.
- 注5) アリストテレス(山本光雄訳)(1980): 政治学。岩波文庫 1333a.  
Aristotle Politics Lobe Classic library Harvard-Heinemann 1977 133a.
- 注6) (注5)に同じ資料 1271b.
- 注7) 石山脩平(1978): 古代ギリシア教育史。日本図書, p.585.
- 注8) 廣川洋一(1990): ギリシア人の教育 岩波新書 p.21.
- 注9) Mortimer J. Adlerは1902年ニューヨークに生まれる。ハイスクールをドロップアウトし、ある新聞社のコピーボーイとして働きながら、コロンビア大学の夜間聴講生になる。この時にJ. S. Millの「自伝」に強く刺激を受け正規の学生になることを決意。才能を認められて、ハイスクールの卒業なしに、学部二年生に編入を許される。大学で古典を中心にした自由学芸教育のGreat Books Seminarに関心を抱き、以降Great Books Projectの推

進が、彼のライフワークになる。コロンビア大学から、シカゴ大学学長のR. M. ハッチンスに請われて、この大学を拠点に、Great Books運動を今日まで展開してきた。このプロジェクトから、学習社会(Learning Society)のコンセプト、コロラド州のアスペン・リゾートのエグゼクティブ・セミナーが出てきたのである。

- 注10) Mortimer J. Adler Reforming Education The Opening of American Mind edited by Geraldine Van Doren Macmillan Publishing Company 1988 This Prewar Generation (1940) 論文を解説したものである。pp.3-22.
- 注11) The Schooling of a people (1957, 1958, 1976)の三論文の解説。pp.114-138.
- 注12) Are There Absolute and Universal Principles on Which Education Should be Founded? (1941) 論文の解説 pp.53-65.
- 注13) Liberalism and Liberal Education (1939) 論文の解説 pp.40-52.
- 注14) Labor, Leisure and Liberal Education (1951) 論文の要約と解説 pp.93-108.
- 注15) ヨハン・ホイジンガ(高橋英夫訳)(1976): ホモ・ルーデンス。中公文庫
- 注16) Milan Kundera (1988): The Art of the Nobel Grobe press Inc.  
この本はPHP京都座談会(主査 渡部昇一 上智大学教授の人間観の研究部会)で、土居健郎博士が、紹介されたものである。Kunderaは、「近代において学問がヒューマンティについて、また存在、普遍的価値について軽視するようになったが、フィクションの世界の小説が小説でしか発見できない方法をもって、この問題を探求してきた」ことを述べている。その典型的な作品として、セルバンテスの「ドンキホーテ」をあげている。
- 注17) 藤縄謙三(1990): ギリシア悲劇における詩と真実。図書, 6月号 pp.12-16.